

月刊
JMITU

アノコノカ



ゆらぐ像

6月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2023年発行

No.462

マイナンバーカード 本当に大丈夫？

なかなか進まないマイナンバーカード登録を進ませようとマイナポイント事業で、ポイントをばらまき何とかマイナンバーカードを浸透させようとしてきた政府ですが、それでも進まない、マイナカードを「デジタル社会のパスポート」と呼び、国民全員に持たせることを改めて強調し、今度は2024年秋の保険証廃止にする。

保険診療が受けられなくなるかもしれないと脅し、マイナンバーカードの取得を強制するためです。

保険証とマイナンバーカードの一体化でマイナ保険証のメリットをほとんどの人が感

現在は感じられていません。

今でも行われている保険証で保険資格を確認して診療する仕組みに何も問題は起きていません。

しかし、マイナンバーカードでは、オンライン資格確認のコールセンターに連絡してもつながらない、カードを読み込む機械が不具合、保険証を持ち合わせていなかったなどの理由で保険資格を確認できず、医療費の10割を患者に請求せざるをえなかった例もあつたようです。また、別人のヒモ付けで間違つた処方から命を脅かす危険もある。

国会審議中にも7千件の健康保険証誤登録が発生したと報告され、さらにコンビニでの他人の住民票の誤発行や印鑑登録証明書の誤交付、公金受取口座の誤登録に加え、他

人の医療情報を誤って開示するなど、想定された事態が続々と明らかになりました。

マイナンバーカードと保険証の一体化は、利用が少ない今の段階でも大混乱を引き起こしています。何の落ち度もない患者、医療機関に多大な負担をもたらし、保険診療の妨げとなつていきます。

民間企業でこのようなことがあれば大問題です。民間であれば一旦このシステムを止め、再発防止策ができてからでなければ開始することはできません。

国民生活に及ぼすであろう多大な情報漏えい等の懸念は何も払拭されていない。保険情報の誤登録や、保険資格が確認できないトラブルがあつても運用は続ける、問題は廃止期限までに何とかするとい

うのが政府方針です。

解決の見通しはありません。

仕事もそうですがデジタル化を進めることで、楽に生産性が上がって、ミスがなくなるのであれば問題はないが、ミスはあるし、生産性が下がるようならば、会社であれば見直しをします。

過去にも政府はマイナンバーカードの前身である住民基本台帳カード(住基カード)というものを発行していましたが、全く取得率があがらず、現在では新規発行も停止となりました。

基本的な人権や情報漏えいのリスクから国民を保護する政府の施策なしにデジタル化を進めることは、大問題で保険証廃止は一度白紙にするべきです。

仙洞田一彦

一九四四年（昭和一九年）、父母は東京中野に住んでいた。その後、父母は実家のある山梨県に疎開している。疎開は四五年（昭和二〇年）のことと思われるが、空襲の前なのか、後なのかわからない。空襲というのは四五年三月一日の東京大空襲のことだが。

私は疎開した地で四五年の暮れに生まれたので、父母が四五年の何時疎開したのかわりたくなかった。空襲後の光景をよく「焼け野原」あるいは「灰燼に帰す」という。紙と木でできている日本家屋は火に弱い。空襲後の写真はまさにそんな感じだ。

この五月連休の日、中野に行くのを思い立った。その地は「中野区栄町通」という。今は弥生町、南台という二つの地名が変わっている。上京した当時買った「東京都区分地図帖」（昭和四二年一月六日版）を見た。たしかに「栄町通」という地名があり、一丁目、二丁目がある。新しい地図と照合したら、都営大江戸線の西新宿五丁目駅が最寄り駅だった。

京急の大森町駅から大門で乗り換えて行った。西新宿五丁目駅からおよそ五百メートル。近くに行くと町会名だろうか「栄町」という名前の看板があった。路地にも入ったが、新しい家ばかりだったが、無理もない。戦後も、もうすぐ七八年になるのだ。空襲で

焼失した後、何度か建て直されているだろうし、住む人も代替わりしているだろう。だが「栄町」という看板の文字を見ると、何とはなしに、あここに父母が住んでいたのかという感慨が生まれる。

私の姉は四四年の春に、こ中野で生まれた。その時に母の母、私からすれば祖母が、娘の出産のために上京してきた。父母の住むアパートの玄関先で撮ったという祖母の写真があった。記憶にあるし、実家のどこかに、いまもあるだろう。

姉はその四四年の暮れの二三日、九カ月の命を閉じた。死亡届が中野区に出されていたので、父母はまだ中野にいたのだろう。亡くなったのが暮れだから、疎開したとすれ

ば年が明けてからの四五年だろうと推測する。

手元に『日本列島空襲戦災誌』（水谷鋼一・織田三乗／東京新聞出版局刊）があったので東京の空襲を拾ってみた。よく聞くのは三月一日の大空襲だが、一機あるいは数機の空襲は連日のようにあった。恥ずかしいが、この本を開くまでは、こんなに頻繁に東京が空襲を受けていたとは知らなかった。

一九四二年（昭和一七年）四月一日「帝都来襲……各地の損害は何れも極めて軽微なり」『日本列島空襲戦災誌』この項、以下同じ）
一九四四年（昭和一九年）一月二四日（金）「B 29 七〇機、帝都（東京）へ初空襲」

一月二七日(月)「東京から
浜松、名古屋へ」四〇機、帝
都及び東海来襲」

一月三〇日(木)「初の帝都
夜間空襲、二〇機」

一月三日(日)「中島飛行機、
再度の来襲」

一月二七日(水)「十九年最
後の空襲」

一九四五年(昭和二〇年)

一月一日(月)「東京」元旦を
迎えて早々の零時一〇分、次
いで一時二十分、各一機ずつ、

静岡県御前崎より帝都へ侵入、
盛り場を中心に焼夷弾を投下、
相当の被害を生ず」

一月二七日(土)「東京大混乱、
米機も損害」

二月一六日(金)〜二七日(土)
「艦機載(艦機?)一、〇〇

〇余が連続来襲」(被害地に
「中野」の記載あり)

二月一九日(月)「東京各区に
焼夷弾の雨」

三月四日(日)「早朝、悪天つ
いて東京へ」

三月一〇日(土)「二時間半で
一〇万人焼死」東京、深夜の
大空襲」

四月二日(月)、四日(水)「時
限爆弾初投下、東京を相次ぎ
攻撃」

四月七日(土)「B 29・P 51連
合で分散来襲」名古屋・東京、
同時に空襲」

四月一二日(木)「戦爆連合
東京・群馬へ昼間来襲」

四月一四日(土)、一五日(日)、
一六日(月)「明治神宮全焼
連続三回・京浜空襲」。主な被

害地に「中野」住吉、昭和通
一丁目、大和、沼袋一丁目、新
井。」とあり。

この日の空襲については

『暮らしの中の太平洋戦争』
(山中恒著・岩波新書・第一
〇章178頁に「過半数焼失」
とみられる中に中野区があげ
られている)

五月二四日(木)、二五日(金)
「皇居炎上 連夜、東京へ大
空襲」「東京都被害状況」の中
に、「中野」丸山」とあり。「五
月二五日二十二時三十分頃よ
り二時間半に亘り、主として

帝都市街地に対し焼夷弾によ
る無差別爆撃を実施せり」の
「被害区域」に「中野」がある。

(記録によつては、空襲が二
五日深夜から翌二六日にかか
るため記録が「二六日」とな
っている)

この後も空襲は続く。最近
『軍・政府(日米)公式記録集
東京大空襲・戦災誌 第3巻』

が手に入った。これには東京
の空襲が、前掲書よりさらに
詳しく載っている。

目的の中野を調べてみた。
五月二五日の「被害区域」中
野区」の項に「栄町」(三一〇
頁・三一四頁)があった。父母
の住んでいたところは「栄町
通」である。「通」のあるなし
だから、同じところだろうと
は思うが、こうなるとどうに
も落ち着かない。すっきりし
ない。

西新宿五丁目駅を降りて、
父母の住んでいたところを想像
しながら歩いた。だいぶ先だ
が、地図上では四つ角があり、
中野駅方面へ曲がれるようだ。
途中に「栄町公園」というの
があったから、「栄町」だけで
町名には「通」がつかなかっ

たのかもしれないなど思ったりした。

四つ角に着いた。右に曲がれば中野駅方面だ。ところがそこに、直進三〇〇メートルのところの中野区の図書館があるという表示があった。疲れが足に来ていたが迷った挙句、意を決し、直進した。

南台図書館という。「南台」の旧町名は「栄町通」だ。図書館のある所はもと「栄町通二丁目」だったと思われる。やはり地元の図書館だ。『中野区史』はすぐに見つかった。それで、必要と思われるところを館内にあるコピー機でコピーした。

「区内の被害」の項目に「五月二六日の大空襲の結果、区内のほぼ五割が焼失した」とあった。さらに「被災地域は、

中野署管内では、塔山町、多

田町、栄町通一、二、三丁目、

……」とあった。父母がいた

ところは栄町通一丁目だから、

この日に空襲にあったかもし

れないのだ。細かいことを言

うと、家にあった地図には栄

町通「三丁目」はなかったが。

『中野区史』は野方署管内を

合わせて「死亡者 四一八名、

負傷者 一、六一三名、全焼

家屋 二〇、七三六戸、全半

壊家屋 四五戸、被災者 七

二、五二三名だった。しかし、

この数字は確認済みの公式の

記録によっただけのものでは

あって、未確認の行方不明者、

家族だけで埋葬された者など

を含めると死亡者だけでも数

千人に達するものと思われる」

と続けている。

この空襲下、父母が無事生

き延びて疎開したとも考えて

いたが、『中野区史』の「建物

疎開」のところを読んでその

思いが少し変わった。『中野区

史』には「昭和二〇年にはい

ると、昨年末からの東京空襲

は激しさを増し、連日昼夜を

分かつたB 29による爆撃が

続き、区内においても一時中

断していた疎開事業をいそい

で再開した」とある。建物の

取り壊しを急ぐために、豊多

摩刑務所の囚人も使われた。

私の考え方を修正させたのは

次のところだ。

「この強制疎開と並んで区民

の引越し熱に拍車をかけたの

が、三月一〇日の下町大空襲

だった。翌二一日からは被災

者一〇〇万といわれる空前絶

後の大空襲の被災者たちが

続々区内に逃れてきて、日本

閣・中野新橋に收容された。

この光景にショックを受けた

区民はこれ以後本気で疎開を

考えはじめた。以後田舎に縁

故のある人員疎開希望者が急

激に増加し、区役所に長い列

をなした」

父母の状況を考えた。前年

の暮れ、私の姉、父母にとつ

て初めての子を亡くしたばかりである。その心理状態と周

囲の状況、つまり引用したと

ころのような状態があれば、

田舎への疎開を考えるのでは

ないかと思った。姉が生きて

いたとしても幼い命を守るた

めに疎開を選択したかもしれ

ないが。父母にとっては傷心

の疎開だった。空襲の恐怖が

追い打ちをかけた。これまで

は空襲を受けてから疎開した

可能性の方に比重をかけて考

えていたが、空襲前の疎開を
考えるようになった。

図書館を出て中野駅まで歩
いた。かなりある。父が徴用
で中野から大森の軍需工場ま
で通っていた時、朝早く家を出
たと、母から聞いた記憶があ
る。当時、西新宿五丁目駅
はなかっただろう。たしかに
これなら早く家を出なければ
ならないと思いつつ歩いた。

その日の夜、疎開が先か、
空襲が先かなどと考えて風呂
の湯につかっていた。その時
ひらめいた、という大げさ
だが気がついた。

祖母の写真は、空襲前の写
真だ。父が中国から復員し、
母と結婚して大森区（今の大
田区）馬込で所帯を持った。
その近くの万福寺境内の写真
も四一年、空襲前だ。布張り

の古いアルバムに貼ってある
写真。空襲で持ち出して助か
ったのかもしれないが、空襲
前の疎開と考えた方がよいよ
うだ。

死者は三月一〇日のほうが
はるかに多いが、逆に、来襲
機数は三月一〇日のB 29は
二九八機・焼夷弾一七八三ト
ンに対して、五月二五日には
B 29は四七〇機・焼夷弾三二
五八トンと多い『軍・政府（日
米）公式記録集 東京大空襲・
戦災誌 第3巻』。

父母がまだ中野にいたとす
れば、アルバムどころではな
い。自身が焼かれてしまうか
もしれないのだ。死者が三月
一〇日より少なかったのも、
父母が助かったのも、アルバ
ムが残ったのも、先に疎開し
たためだったかもしれない。

書いているうちに、籐椅子
に座っている幼い女の子の写
真を思い出した。姉に違いな
い。写真館に行つて撮つたの
だろう。父母ともにまだ二〇
代、当時の父母の気持ちと思
い浮かべようと、湯につかつ
たまま顔を上に向けて目を閉
じた。